ヤヌシュ・コルチャック

津守　真

チェコスロバキアの首都プラハで、ＯＭＥＰ（世界幼児教育機構）の理事会が開かれたとき、私が出席した小委員会の席で、戦後四十年間の幼児教育の歴史が話題になった。

一九四五年に第二次世界大戦が終わったとき、戦争で両親を失った子どもたちが、ヨーロッパでも巷にあふれていたことをこの小委員会に出席した人々の多くが直接に知っていた。今回出版された「ＯＭＥＰ最初の十年の歴史」（The First Ten Years 1946-1956）は、その頃のことから記されている。それから一九六〇年代、七〇年代の世界を風靡した知的早期教育論の時代がきた。それは実践者にとっては周縁のことでありながら、実践の場は揺り動かされた。私の世代の人ならばたいがい知っているベライター・エンゲルマン方式などに話は及びながら、英国、カナダ、アメリカなどの人たちから、その風潮の中でも実践者は人間を育てる仕事を地道にやってきたことが次々に語られた。そのとき、ポー

ランドのシコルスカ女史が、教育では情緒の教育が基礎になるのではないかと前置きして、ポーランドの小児科医であり教育者であったヤヌシュ・コルチャックのことを話しはじめた。彼の著書は、ヒューマニズムに貫かれており、現在もポーランドの教師や親たちに広く読まれているという。彼は戦争中、ポーランドのユダヤ人ゲットーの中に住み、子どもたちのために働いたことを、ゆっくりとした英語で、頬を紅潮させてシコルスカ女史は語った。その情熱的な話に私共はひきこまれ、次々に質問し、小一時間の時が過ぎた。彼はいつ死んだのかをたずねられて、シコルスカ女史は言葉を濁した。いま思うと、彼女はそれを口にするに耐えられなかったのだと思う。私もいろいろと質問した。

帰国して一月半ほど経った十一月の末、シコルスカ女史から二冊の書物が私の学校宛に送られてきた。一冊は、マレック・ヤウォルスキー著「ヤヌシュ・コルチャック」＊で、この人の生涯を記した伝記である。もう一冊は、「ヤヌシュ・コルチャック著作選集」＊＊である。七〇〇頁に及ぶ布製表紙の英訳本である。保育の現場にいると、子どもたちとの実際の生活とそれを考えることで精一杯で、本を読むエネルギーが残らない毎日なのだが、私はこの本を手にとって頁をめくっているうちに、思わず読まされてしまった。

こういうわけで、今回はこの書物を紹介しようと思う。

「ヤヌシュ・コルチャックの出生の日も死亡の日も正確にはわからない」という書き出

しから、伝記ははじまる。彼は一八七八年か九年の七月二十二日に生まれ、一九四二年の夏にナチの強制収容所で死んだ。伝記には次のように記されている。

「八月五日に、彼は彼の孤児院の子どもたち及びスタッフたちと一緒に、ワルシャワのグタンスク駅の引き込み線から汽車に乗せられたことを私共は知っている。そこから出発した汽車はすべて同じ場所に向かった。トレブリンカ第二収容所である。」(P.7)

コルチャックは医者であったし、逃げようと思えば汽車に乗らないですんだ筈だった。「しかし彼は、彼が世話をしていた子どもたちと共に死ぬことを選んだ。」(P.10)

この簡潔な記事にすでに多くが語られているが、もう少しこの伝記によって彼の経歴を付け加えておこう。

ヤヌシュ・コルチャックの両親は、長くポーランドに住んだユダヤ人だったが、宗教(ユダヤ教)については熱心ではなかった。彼の成長期にも家庭の中で宗教は重視されていなかった。血筋ではユダヤ人でも、文化的にはポーランド人だった。彼は医学に進んだが、演劇の脚本家になることも志していた。実際、彼はいくつも脚本を書き、そのいくつかは上演もされた。また少年のため文学作品も書いている。教育に関する著作も文学的味わいがあり、英訳も難解である。ヤヌシュ・コルチャックというのはペンネームで、本名はヘンリック・ゴールドシュミットという。

伝記には、コルチャックが医者から教育者になる過程を、日記や著書を引用しながら詳しく記す。

「医師として、私は症状をみる。皮膚の発疹、咳、熱から……私は症状の奥にかくされたものをさがす。教育者として私は症状を観察する。笑み、恥ずかしがり、泣き、あくびをし、叫び、ためいきをつく。……怒ることなしに私は症状を確認する。……ときによって一見何でもない小さな症状がはるかに重要なことを物語る。医者として教師として、詳しいことは分からないのだが、偶然のようにみえ価値のないようにみえるすべてのことを熟視し観察する。」現代流にいうならば、現象の中にすべてがあらわれるという考え方ともいえる。教育の実践に共通のことなのだが、医師と教師とを対比することによって明瞭に述べられている。

一九〇九年、コルチャックはワルシャワ市内の一孤児院の長となった。その後の彼は、子どもたちの中で生活しつつ考える教育者となった。ヤウォルスキーによれば、「彼はできあがった教育理論を実践に移したのではなく」子どもたちの中で生活しながら「ひとりひとりの子どもの状況に合うように理論を創造しつづけた。」コルチャックの著書を読んでいくと、彼がそれぞれの子どもをよく見ていることに驚かされる。そしてそのことが彼の理論となっている。「こうして、十九世紀から二十世紀へと時代が移りかわったとき、ヘンリック・ゴールドシュミットは、医師、ソーシャルワーカー、文筆家、同時に保育者であるヤヌシュ・コルチャックに変身した。」(P.36)

ここで保育者と訳したのは、ポーランド語の原文では〝Wychowawca〟という。そのことについて著者の注に次のように記されている。「この語は、英語に慣れた耳には奇妙

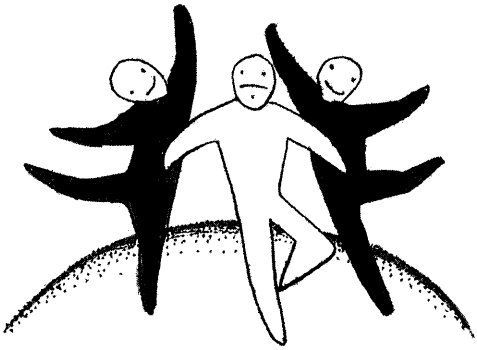
に聞こえるだろう。このポーランド語は翻訳することがむずかしい。その内容は英語圏にも存在するのだが、いまだ名前を与えられていない専門的仕事を指している。Wychowawca とは、子どもを育てる人であり、専門的責任を負った者として子どもの身体的社会的発達を配慮する人である。彼は親ではなく、教師でもない。しかし、その両方の機能を果たし、支える者である。必要に応じてそのいずれにも代わる者である。」まさに日本語の保育に対応する語といってよいのではなかろうか。

彼の主著のひとつである「いかにして子どもを愛するか」（一九一九）は、百十六の小節より成る教育論集である。彼が四十歳になったばかりのころの著書であるが、その透徹した子ども観、教育観に私は驚嘆しつつ読んだ。

子どもはいつ歩き始め、話し始めるのがよいのでしょうかとの問いに対して、彼は次のように答える。「それはその子が歩きはじめたとき、はなしはじめたときです」と。「もちろんそれらが一般にいつ生じるのかをわれわれは知っている。育児書や教科書にはこうした小さな事実は一杯書いてある。それらは一般的にいって妥当である。しかし、あなたのこの子どもにはあてはまらない。」（P.127）コルチャックは二十世紀前半を生きた人だから、米国の児童心理学も新教育も知っていたと思われるが、教育の実際にあたっては、どこまでも実践そのものを重視していたことがわかる。彼は子どもを生命ある自然にたとえる。「警察の規則によって養われた心をもって、生きた自然の書物（ともいえる子ども）に手

をのばす人は、頭でっかちの重荷によって心が混乱し、心配と失望と驚愕に陥るだろう」(P.128)と彼はいう。つまり自然そのものといえる子どもを、観念的な期待や規律をもって見るならば、その大人は失望したり心配したりすることになる。更に、同じところでつづけていう。「われわれは二つの尺度を用いねばならぬ。ひとつは感受性をもった親に対してである。彼らは自然研究者のように振舞う。彼らは懐疑を承認し、推測し、困難な問題に直面し、そして興味深い質問をする。もうひとつは愚かな親に対してである。彼らは事務的な教師のようである。入門書に爪の先でここかしこと印をつける。『二時間おきに一匙、卵一個、コップ半杯のミルクとビスケットを二枚』と。(P.128)

コルチャックは、子どもの権利について、三つのことをあげる。第一は子どもが死ぬ権利、第二は子どもが今日を生きる権利、第三は子どもがあるがままの自分自身である権利である。第一のことの意味は、子どもが大人から不当に扱われたときには、たとえば問題行動を起こす権利があるというように解していいのではないかと思う。現代の日本についていえば、登校拒否をすることもこの権利の中に数えられるだろう。彼はいう。「白く塗られた部屋で、白いエナメルの家具に囲まれ、白い服を着せられ、白い顔をした子ども、白い(汚れていない清潔な)玩具を見るたびに、私は最も不快な感覚を経験する。それ



は保育室ではなくて外科の手術室だ。貧血の身体に、血の気のない精神が発達する。」（P.130）

第二の権利について、別のところで彼は次のように述べる。「子どもが死ぬことを恐れて、私共は彼から生を奪う。……われわれは前方のものを受ける準備をするために、今日の美を求めることを拒否する。明日には明日自身のインスピレーションがあるのに」と。コルチャックは似たようなことを各処に述べるが、私はこれは教育の本質にふれることだと思う。幼児のときから、大学入学、就職のことまで心配して、今日の美しさを見失っているのが現代の日本の姿である。何故に明日ばかり追い求める人になるのか。彼はいう。「われわれ自身が活性のない堕落した期待の中で育てられたから、たえず心を魅了するような未来へと急ぐのだ」と。つまり、人が自分自身に意味あるものにではなく、外部の期待に沿うことに慣らされたとき、刺激的な未来をたえず求めるようになり、今日を生きることができなくなる。

「もうそろそろ歩いてもよいのに、ことばをしゃべってもよいのにとは何とヒステリカルな期待であることか」（P.130）と彼はいう。私は障害の子どもの世話をすることが多いので、同様のことをよく聞かされる。コルチャックは、これを親の自分勝手で感情的な期待だという。あるがままの子どもの現在を認めず、眼前の子どもにないものを期待するのが教育だとする誤解も、世の中にかなり広く浸透している。子どもが今日なしうることをするのが教育の実際であるのに。

コルチャックの孤児院での少年達の集団の教育については、彼の面目の溢れた論説がいろいろあるが、ここではこの偉大な教育思想家のごく一部を紹介するのにとどまる。

会議が終わってから、私はプラハのユダヤ人ゲットーを訪れた。ユダヤ人墓地の隣に、ナチの強制収容所で死んだ子どもたちの描画を蒐集した美術館があった。その事実だけで胸の痛む思いがするが、収容所で描かれたそれらの絵が普通の子どもの描画と変わらないことに私は驚いた。空に太陽が輝き、地面に花が咲き、家がある。収容所の風景を題材としたものも、暗さを感じさせない。この子どもたちは最後の日まで現在を生きていたからなのだろう。

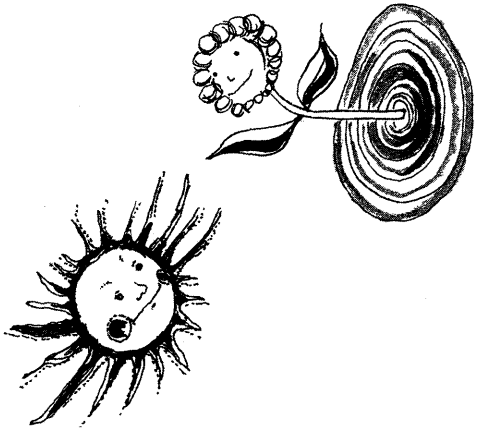
いまコルチャックの書物を読んで、収容所の中にも、ここに記されたような保育者が子どもたちと一緒にいたのだろうと考えた。

ヤヌシュ・コルチャックの死をめぐっては、多くのことが伝説的に語られている。彼が子どもたちを引き連れて駅に向かったとき、幼児から十四歳の子どもたちと職員達は四列に並び、手に緑の旗を持って行進したという。緑は希望を象徴する。コルチャックはその先頭に立ち、いちばん幼い子どもを片手に抱き、次に小さい子どもの手をひいて歩いていたと目撃者は証言している。

伝記作者ヤウォルスキーは、ヤヌシュ・コルチャックをペスタロッチに並ぶ教育思想家

と評し、彼の精神はポーランドにとどまらず全世界のものだと結んでいる。

＊　Morek Jaworski "Janusz Korczak" Interpress Publishers, Warsaw 1978

＊＊　"Selected Works of Janusz Korczak" Selected by Martin Wolins, Translated by Jerzy Bachrach. Available from the U. S. Department of Commerce, Clearinghouse for Federal Scientifie and Technical Information. Springfield, Virginia, 22151

（愛育養護学校）